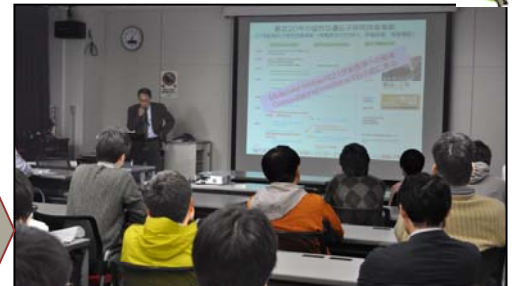


(みやぎ県南中核病院・顧問)

Buildable! Computational Medicine : mini-sabbatical で垣間見た米国の臨床における bioinformatics 展開

次世代シーケンサーの登場により、大規模なデータを情報処理して解析する能力が今後ますます必要になってくると考えられます。貫和先生は、生化学、分子生物学に続き、全ゲノム解析を中心としたバイオインフォマティクスが重要な位置づけになり、大きな転換期を迎えていると力説されました。先生は、退官後にサバティカルを利用し、元留学していた米国の大学における生物情報科学の現状と今後の展望についてお話されました。講演中には、実際に米国で学んできた手法を使って、喫煙者と非喫煙者の網羅的発現解析のデータベースを利用し、解析の流れのデモを行なっていただいた。講演の最後には、生物情報科学と統計的処理を融合的に扱える若手の人材育成と、積極的に情報処理を学ぶべきだというメッセージを贈っていただきました。退官後も関わらず、先生の常に新しいことを学ぶ姿勢とその熱意には驚きました。今後、先生がおっしゃったメッセージを忘れずに融合的な視点を磨き、より良い研究ができるよう研鑽していきたいと思えます。

弘津 陽介 (医化学分野・大学院生)



参加者の感想

アメリカの医療や医学研究におけるインフォマティクスの現状を軽妙な語り口でご講演いただき、大変興味深く拝聴することができました。医師やウェット系の研究者は、インフォマティクスの敷居が高く敬遠しがちであるが、膨大なデータの中から適切に情報を抽出することは、今後必要不可欠なスキルとなることが分かりました。

molecular biology から全ゲノム解析の時代、そして現在立ち上げられている computational medicine へと世界的な研究の変遷をととてもわかりやすく聞くことができ、とても興味深い講義でした。Cornell 大学での computational medicine の立ち上げの話と、これまでのゲノム解析を生かすために、臨床家こそが疾患と genome の情報を結びつけるための研究をこれからやっていかなければいけないというお話にととても心を惹かれ、また、退官後もなお知的な好奇心を絶やさず探求し続ける姿に尊敬の念を抱かざるをえませんでした。有意義な講演をありがとうございました。

